

## 旅先にて、好きな小説家は誰ですか



中部地区医師会 会長 安里 哲好

アガサ・クリスティーの「オリент急行の殺人」の一部を模した旅と言うわけではないが、ウィーンからイスタンブールまでの汽車の旅をした。旅の何日目かに、セルビアのレオグラード駅を朝6時50分に出発し、ブルガリアのソフィアに向かった。その汽車は通路が進行方向の左側にあり、客室が3人掛けのボックスタイプで、等級はなかった。汽車が出ると同時に、バックパックを担いだ女性が入ってきた。私は、相手の顔を見ないように、いや自分の顔を隠すようにして旅行ブックに目を通していった。女性はバックパックを置き、通路に出て広い窓の外の景色を見ながら朝食を取っているようだった。しばらくして、客室に入ってきて何やら本を出して読んでいた。次の駅で、男性が荷物と3Lのお茶のボトルを持って入ってきた。ヤァーと言い、お互いハグし頬を寄せ合い、久しぶりの再会を喜び、語り合っているようだ。その内、男性は私に語りかけてきた。いや、女性の方が、最初に語りかけてきたかもしれない。男性は、最初にお茶と思った3L入りボトルのビールを勧めた。私は、日本では朝からお酒を飲む習慣はありませんのでと断ると、ここは日本ではないですよと言われ、再度、女性からも勧められた。日本ではないし、旅先だから良いかと思い、女性から差し出された3Lのボトルの口を拭き、なるべく接しないように飲み、飲みたいやら、飲みにくいやら。白い肌、金色の髪、青い瞳の中欧の女性を目の前にしても、少々アルコールが入りグループであることも手伝って、私の口も滑らかになる。

男性がカンフーンについて話すと、私は沖縄の空手について話した。男性は沖縄を知っていて、アメリカの基地のあるところだねと言っていた。女性と話しているうちに、女性は芭蕉の俳句が好きだと言い、また、村上春樹の小説を好んで読んでいて、新しい翻訳の情報が入ると直ぐに手に入れて読むとの事。何処が好きですかと尋ねると、文章がシンプルで解りやすく、

それでいて、人の心の繊細なあり方を描き、黄泉の世界との繋がりがあり素晴らしいと言う。女性が好きな小説家は誰ですかと尋ねた。開高健と答えようとしたが、どんな小説を書いていますかと問われるであろうと頭の中に浮かび、答えられなかった。読んだ「オーパ!」、「地球はガラスのふちを回る」や「ロマネ・コンテ・一九三五年」は旅行記やエッセイ集で、小説だろうかと思い、答えられずにいた。汽車の上窓が開いており、小鳥のさえざりが聞こえたので、問いに答えず、小鳥が素敵な音を奏でていますねと呟いた。

帰国後、開高健の「裸の王様」を読み、あの外観に似合わず繊細な文章を綴る小説家であることを確信し、感嘆した。その本は、社会の価値に押しつぶされそうな閉ざされた心を持つ少年を、画塾の教師が絵を描くこと、そして自然との触れ合いを通して少年の心を開放していき、引きこもりと言う先取りされた現代社会における問題が数十年前にすでに描き出されている。画塾教師と登場する友人とは、違う考え方や生き方が対比して設定されていた。また、画塾教師が起案し、辞書を引きつつ難儀して英文の手紙を書き、粘って何度も交渉したスウェーデンの子供達との絵の交流と言う企画を、会社や社会が巧みに自らの事業目的に応じて変容させていく過程で、画塾教師は本来の主旨さえ伝えられれば何も望まない真摯な気持ちが伝わってきた。

私の愛読書として、開高健の代表作「夏の闇」にするか、遺作「珠玉」にするか迷ったが、彼のノーベル賞作家大江健三郎と芥川賞を競い合った作品「裸の王様」について書いた。アァー、開高健よ、危険に満ちた旅にさえ出なければ、酒と葉巻の日々を送らなければ、美食や珍味を追求しなければ、高き所に昇れたのに思うと同時に、高き所に昇っていたら、私が開高健と言う小説家に出会えることも無かったかも知れない。